

俳人岡西惟中と一七〇七年宝永地震における大坂の被害数

矢田俊文（新潟大学フェロー）

はじめに

本稿は、宝永四年十月四日（一七〇七年十月二十八日）に起きた宝永地震の全体像を明らかにするための基礎研究として、「古今堪忍記」「大地震祈祷連歌」といった文芸作品に記された地震記事の検討を行うものである。本稿で検討する「古今堪忍記」「大地震祈祷連歌」は、地震史料として検討されたことのない作品である。

文芸作品に記された地震記事としては、寛文二年（一六六二）五月一日の近江・若狭地震を題材とする寛文三年（一六六三）頃刊行の浅井了意作『かなめいし』⁽¹⁾が知られる。『むさしあぶみ』⁽²⁾について、坂巻甲太氏は一六五七年の明暦大火を叙した報告文学であると説明している。浅井了意のような報告文学以外でも災害を取り上げた文芸作品は存在する。本稿は報告文学ではない文学作品に記された災害記事を検討する。

一 「古今堪忍記」と宝永地震

一では「古今堪忍記」に記された地震記事がいつの地震を題材にしているのかを明らかにする。

俳人青木鷺水は京都に住む浮世草子作家である。青木鷺水の浮世草子「古今堪忍記」⁽³⁾には次のような地震に関する記事が書き込まれている。

古今堪忍記巻第七

恋路の堪忍

（前略）

一とせ、ぬけ参りといふ事をおもひたちける女、はうばいあるをうれしく、此つれを頼てともに参宮しけるにそ、ふるさとハ此道すぢなりければ、何のさハリもなく帰るへかりしに、又ぞやはどのかいといふ者に勾引され、纒なる路銀もことくくとりれぬ今ハ、ありし国もとへ帰らんといふにも、道ふミたがへたる身なれば思ふ甲斐なし、ふるさとの方ハましてはるかなりなと聞おきぬ、こハいかになれるはてぞと、かなしく涙のおつるにも、震司をおもひそめしより露わすられず、いかにもして今一たび此はかなき願ひのすゑをとげてこそ、ともかくにもなるべけれと思ひしも、いたづらにしらぬ国さとの草葉の露とや消はつべきと、こしかた行すゑをおもひつゝくるに、かなしさもいやましなれば、とある木陰にやすらひつゝ、傍輩の女とふたり泣みたるに、其辺四町ばかり隔て浜ありしが、地震おびたしくゆりて、里人などおめきさけび、我一と四方へ逃まとふに、此二人ハいづかたへ逃んも方角もしらず、逃ても故郷の方へ帰り行べきよしもなけ

れば、只おなし所にふしまるび、とてもかくうかれたよへる身の思ふ事さへかなハざらん身ならば、ともかくにもなして此世のうさを見す聞ぬ国へむかへ給へと泣々かきくとき居たるに、やうく地震もしづまりぬと思ふ此、沖より津なミとかやいふものゝおびたしく打かけ、雲けふりをたてゝ山も爰にゆるき出たるやうなるがさつと打よせしに、あやまたず此二人の女をも浪の内に引とられぬ、さりとも今迄は猶ながらへて、思ふ人にあふ事もやと心にたのめしも、いたづらに引しほの浪にゆられしづミはつるにもあらず、しばしかほとゝおもふに、物に引かゝるやうにおぼへしが、つれの女ハしらず、あさましき舟の内にふと打あけたり、こハいかになりゆく身ぞと、そこら見まハすに、つりするあまのをふねなり、此ふねの主とおぼへて五十はかりなる男、浜のかたよりはしりきて、此すがたを見とかめ、さてく命めうがや、そもそなたハいかなる人のいづくへ行とてかゝるおそろしき浪にハとられ給へるやとふに、きへいるやうにてくるしきなから息のしたより彼あらましをかたるに、

(後略)

内容を津波記事に注目してまとめると、次のようになる。

幸子は青震司を見初めるが、他国に嫁ぐことになる。そこで幸子は病氣となり、嫁ぎ先から返されることになるが、途中で騙される。しかし、抜け参りに紛れて逃げ出すことに成功する。ところが、津波にあい、死ぬ思いをしたが、たまたま青震司が以前召し使っていた家来に助けられ帰京し、青震司と結婚をする。

「古今堪忍記」は宝永五年（一七〇八）正月に刊行された。⁽⁴⁾宝永地震は宝永四年十月四日に起こっているのので、「古今堪忍記」の津波の話は宝永地震を題材⁽⁵⁾にしている可能性が高い。

二 岡西惟中と宝永地震

二では、岡西惟中の連歌「大地震祈禱連歌」に記された地震記事について検討する。

岡西惟中は井原西鶴と並ぶ西山宗因門の談林の俳人であったが、延宝末年頃、談林派の俳諧が下火になると、俳諧から離れていった人物である。⁽⁶⁾

岡西惟中は宝永四年十月四日の地震を体験し、その体験を連歌「大地震祈禱連歌」に記している。「大地震祈禱連歌」は雲英末雄氏によって翻刻と史料紹介が行われているが、⁽⁷⁾内容の検討をされているわけではないので、ここでその検討を行う。なお、雲英氏の翻刻を早稲田大学図書館雲英文庫所蔵本によって一部修正して本稿の末尾に掲げた（史料1）。

岡西惟中は岡山から大坂に移住し道修町に住んでいたことは知られている⁽⁸⁾が、小林孔氏は大阪府立中之島図書館道修町文書の道修町三丁目の史料を検討することにより、岡西惟中の名が元禄十一年（一六九八）から同十六年（一七〇三）までみられることを明らかにしている。⁽⁹⁾このことから、岡西惟中は宝永地震の直前まで、道修町三丁目に居住していたことが確認できる。

また岡西惟中「勢陽巡覧記」の奥書には、「宝永丁亥三月日、撰州寓居、北水浪士惟中⁽¹⁰⁾とあることから、地震が起こった年である宝永四年の三月も、撰州に住んでいたことが確認できる。これらのことから、惟中本人が地震を体験したうえで「大地震祈禱連歌」を作っていることは間違いない。

岡西惟中の「大地震祈禱連歌」には「はし^(橋)く卅五六橋斧もてさくこけらのことくに砕けて」とある。橋が三十五、六砕けたとあるが、砕けたと記される橋の数は、地震の翌日十月五日に幕府に報告された被害数と同じである。⁽¹¹⁾

宝永地震による大坂三郷の被害数は幕府にもたらされた情報によると、竈数

三五三七、軒数(町役・役家)六五三軒、圧死者五三五一人、溺死人一六三七一人であった。⁽¹²⁾ 圧死者と溺死者をたすと死亡者は二二〇〇〇人を越える。「大地震祈禱連歌」には、「男女老若二万余あけなる血をはき、骨むらひしけて、たちどころにむなしくなりぬ」と記される。大坂の住人も幕府が把握していた死者数二万余と考えていたことがわかる。

宝永地震における大坂市中の被害情報を検討した原直史氏は、地震後に得た情報をリアルタイムに筆録したことがほぼ確実であるものがあるとし、公的ルートで幕府等に報告された数値が写されたものから伝聞を筆録したものもあり性格は多様である。伝聞ではあるものの町政機構を通じて集計された数値に関するリアルタイムな情報に基づいて記録しているものもあるとしている。⁽¹³⁾ 岡西惟中の「大地震祈禱連歌」に記された地震被害情報は、岡西惟中が大坂住人であり、幕府にもたらされた被害情報と同じであることから、伝聞ではあるものの町政機構を通じて集計された数値に関するリアルタイムな情報であったと考えられる。

岡西惟中がどのようにして碎けた橋の数と死者数を把握したのかは明確にはできないが、宝永地震当時、大坂に住んでいた人物が記した被害数なので重要である。

おわりに

以上、宝永四年(一七〇七)に起きた宝永地震の全体像を明らかにするために基礎研究として、文芸作品「古今堪忍記」「大地震祈禱連歌」に記された地震記事の検討を行った。

本稿で明らかにしたことは以下の二点である。

1 青木鷲水の浮世草子「古今堪忍記」の津波の話は宝永地震を題材にしてい

る可能性が高い。

2 宝永四年当時大坂に在住していた俳人岡西惟中は体験した一七〇七年宝永地震で橋が三五、六落ち、死亡者が二万余であったという情報を得ていて、それを「大地震祈禱連歌」に記した。

災害の被害情報は、庄屋(名主)、大庄屋・組合村、藩・代官、幕府だけではなく、俳人も確かな情報を入手していた。幕府等へもたらされる情報とともに、地域住民が入手した被害情報の研究を進めていかなければならない。

註

- (1) 井上和人校注「かなめいし」、谷脇理史・岡雅彦・井上和人校注『仮名草子集』小学館、一九九九年
- (2) 坂卷甲太「浅井了意と『むさしあぶみ』」坂卷甲太・黒木喬編『むさしあぶみ』校注と研究』桜楓社、一九八八年
- (3) 小川武彦編『青木鷲水集 第四巻』ゆまに書房、一九八五年
- (4) 小川武彦編『青木鷲水集 別巻研究編』ゆまに書房、一九九一年
- (5) 貞享元年(一六八四)に新暦改正が行われ、井原西鶴の浄瑠璃『暦』が貞享二年正月に刊行され、二月一日大坂道頓堀で上演されている。檜谷昭彦「貞享初年の西鶴と『暦』」同『西鶴論の周辺』三弥井書店、一九八八年。文芸作品に世間が注目する事柄を取り込むのは早い。
- (6) 岡西惟中は西鶴と比較して評価の低い俳人であったが(上野洋三「岡西惟中年譜稿」『国語国文』三七―一一、一九六八年、上野洋三「岡西惟中論」『文学』三八―五、一九七〇年、乾裕幸「西鶴の《軽口》と惟中の《寓言》」同『俳諧師西鶴』前田書店、一九七九年)、近年は再評価が行われている(川平敏文「寓言―惟中と伊勢物語学」『江戸文学』三四、二〇〇六年、川平敏文「俳諧寓言説の再検討―特に林註莊子の意義」『文学』八一―三、二〇〇七年、川平敏文「江戸前期における禅と老荘」井上泰至・田中康二編『江戸の文学史と思想史』ペリカン社、二〇一一年、篠原進「八わりましの名をあげて―惟中という陰画」『青山語文』四四、二〇一四年)。
- (7) 雲英末雄「岡西惟中資料二点」『大阪俳文学研究会会報』二四、一九九〇年
- (8) 米谷巖「惟中の上阪と西鶴」『国文学攷』二二、一九五九年
- (9) 小林孔「岡西惟中の寓居」『大阪俳文学研究会会報』四一、二〇〇七年

(10) 佐藤勝明・伊藤善隆・金子俊之編『元禄時代俳人大観』第二卷 元禄一一年〜宝永四年、八木書店、二〇一一年

(11) 矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」『災害・復興と資料』第二号、二〇一三年

(12) 矢田俊文前掲「1707年宝永地震と大坂の被害数」

(13) 原直史「宝永地震における大坂市中の被害情報について」『災害・復興と資料』第四号、二〇一四年

〔付記〕査読者から有益なご意見をいただき、本論文が改善されました。本稿は基盤B（課題番号17H02385）の成果の一部である。

（史料1）

大地震祈祷連歌

人世は大夢のことしと唐の李太白か書し、其夢の中に、夢にもあらず天災地妖の大変、古しへも今もしか也、ことし宝永丁の亥ものそ悲しき、神無月初の四日未の刻はかり、日もはれ、空も碧なるに、乾の隅よりそこともなく地の底なりいて、なへといふものふるひ、半時過るほとに、国中の家、あるは崩れ、あるハ破れ、寺社の礎もかたふき、柱さけ、かれ是三千余軒の数と聞へぬ、これしかたゝならぬに、名におふ一の洲のおもてより、二丈余も高き怒潮晩汀をのむ勢ひおひたゝしく、いと大きな舟とも、ゆたのたゆたにゆられ、いくらともなくもろ河の浅瀬に白浪うちいれをしいれ、はし／＼卅五六橋、斧もてさくこけらのことくに砕けて、はし柱所／＼にのこりて、かゝるなやみに、男女老若二万余あけなる血をはき、骨むらひしけて、たちどころにむなしくなりぬ、もろ／＼足を空にしてあなたへはしり、こなたへかけり、あしたゆふへをしらぬ世なりと、商賣ハほのか業なるあきものをやめ、農民ハ鋤鋤を手にならさず、武士は革きぬまとひたゝり／＼とし、悲涙の声さながら雷霆のはためくことく、目に見、耳にき／＼て、皆氣をのミ、かの三笑に乾坤も此時の株ふせるかと驚きあへり、けにや露宿風飢の蟬のこと木かくれてぬるゝ袖にもあらず、爰の浜へかしこの曠野にたゝなよ竹のなよ／＼とふし煩ひ、ひとりも安きこゝろも見へず、仏を念し、神に祈声／＼に、悲しむしかあれども、かゝる蹇難禍福寿天さらに人力のはかるへくもなく、悉天のなせるわさハひなれば、ひたすら天命に安んじつゝ、しミゐるより外ハなしと、われにすかる妻を携へ、つかふる僮僕をひきゐて、其まゝ板もて、ぬけるかるき屋の下にかゝまれり、古人の宣ひし、動静一時の思ひを忘れず、泰然として座しぬ、こゝに近曾よりわかゝとに舎りせし山木といへる隠逸の人、新治筑波の陰にあそふあり、いさ心のはしらをゆり、すへて上下の句を綴り、此夜をあかさましと、よくもあらぬ発句して、天

津神・国つ祇の加護もあれなと十七字当季の中になへふるなと云詞をたちいれて、山木子に見せ合せければ、いとおかしとて、筆とる脇第三出きぬ、さらハ百にみたしめむと、四日の夜よりあくる五日の夜をかけて、みてぬ人のかなしむ時ハ共に驚き嘆く折ハ苦にうなたるへき事になといふ人もあれと、かゝる患難危機のうちも自得の境に心をあそはしめ、命を知り極を建る聖語により、心を常にしてこそいさゝかもの学ひする其かひもあらめ、矯なるかな、強たりとこうもなく頭をかたふけ連歌になりぬ、こゝにて、魂をうはハれ心をうこかさは、女兒と丈夫のわいたためもあらしと思ふ事ハ、いかゝ人思ハんや、後見んために句のよしあしハしらすしるしぬ

吹なへにふるなしくるゝ小夜嵐

冬も猶見ん松の戸の月

檐近き山の紅葉ハ散やらて

一すちしろき谷河の水

日和よしと明はなれゆく旅ころも

裾野のかすみ分ならずらし

草／＼の静けき陰になく雉子

いとはやとくる今朝の淡雪

春ながら長雨ならぬ音ハして

苗代水のすゑハほそしも

此里のかたへにわたる丸木はし

たれかむかひにすむひとつ庵

日ハくれぬいてや舎りをかり枕

露分きつゝ見るをみなへし

薄霧にぬれてもあかすかりころも

くむさかつきハ肌さむきころ
端居して今夜の月をめてあかし

またれてわたる初鴈の声

漕とめし舟ハ畳ならぬ海頬に

ことの葉たへてなみの島山

風はあれとうこかぬ雲や花ならん

霞はれ行遠の岩かね

下みつる友をしたふハのとかにて

広き田面に養るむら鷺

雨過て夕日のかけハさし残り

左提にかゝれる瀬々や涼しき

加茂川やさゝなみ誘ふ風立て

秋を見せてやちる柳かけ

月に猶光ある露の玉ならし

ほたる身にしむ野辺の黄昏

そよ／＼と戦く音するくさむらに

ゆく袖しるき篠の葉かくれ

朝霜に袂しほるゝ旅ハうし

さえきく風のやふる菅笠

氷るへき浪ハ筏を越けらし

さかまく水のきほふ灌川

大きな鯉ハ中にもひれふりて

岩のうつほも明はてぬめり

朽なからみとりにみゆる松一木

いろになりつゝはふ蔦かつら

露時雨淀のわたりハたひくゝに
都たつより涙冷まし

左迂るうき身のあハれ月も知れ
おほつかなきハ人のゆくすゑ
目に見へぬはちすの上を契り恋

かほれる風の江にかよふ声
うかれ女の袖や小舟にうたふらし

わかれおしみて酔をすゝむる
尋よりなれぬれハちる花の下

やとりを梅にかふる初蝶

春の野もあたゝかなぬきのふけふ

積りしうへに雪ハふりつゝ

白髪となりはてゝうき我よはひ

才ひとつたになきハはつかし

いかにしてこゝろの鏡見かゝまし

色さひよ池の月なやつしそ

菱の葉もうらかれぬれハまはらにて

世ハ秋なりとたゝく船ハた

かしこきともいハすして去ぬらし

さとりけしきハそれとしるしも

むれてゐる猿ハ和らく日よし山

さひしさわふるおくの柴の戸

松の風杉のあらしに目ハあはて

こけをまくらにし夜悲しき

更て猶露けき袖や氷るらし

かよふも遠き妹かりの道

黒駒におもひをしらハ急けたゝ

待しこゝろの花を見ん峰

雲もはやほのくかすむ空の春

としたつあした日影うるハし

しつかにも神の治る蜻蛉洲

外も音なきすみの江の浪

うてはうつ人もねぬらし蟹衣

笹屋の月のかたふけるころ

皇の表にこもりぬる秋やうき

ものゝねたへてわたる夕風

遙なる雲に消ゆく山からす

野に手はなせる鷹やそれけん

たハゝにもかれたつ櫛ハ弓のこと

つるきと見ゆる霜のむら竹

問よれハ朝気さひしき古塚に

すむやきつねの臥所ある跡

そことなく荒し檜皮の軒の草

むすへる露もふかき御社

瑞籬の前行水の秋すゝし

かけハなかれて月すめる暮

塵をふく瀬見の小河の風の音

かりの身とする我世うれハし

おとろへにかさなる老のおとろかれ

寢覚して猶きる厚衾

あかつきの霜の下いほ堪わひて

ふゆ田の鳴の床はなるらし

うちわたす沢辺の草の陰あさミ

をれたる竹ハ風やわつらふ

かこへるも山かたつかぬ市屋かた

かすむひま／＼たてる小車

人あまた春日祭にいさなひて

うら／＼なる野を行つ帰りつ

説法も開くる寺の花の時

手にとる巻の紐もなかき日

あけ句せる心をおもふに、なにの難もなくよろこひあへるに、弥命をたもちて
文の巻／＼も紐ときて、なかきたのしミもあれと、祝したるになん、余もつと
も起居泰然として日のもとの神明のたとき事をおもひ念しつゝ、家の柱に一首
かきつけて、猶心をしつかになしぬ

たのめたゝよしくこくともあらかねの

つちしつめます神の御はしら

右一時軒直筆之藻塩草抜粹也